
独奏のクラヴィーア

木村 優希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独奏のクラヴィーア

【Nコード】

N1605F

【作者名】

木村 優希

【あらすじ】

過去を置き去りにした世界で、歌う侵略者と奏でる抵抗者、両者の音は交わらずに激しくぶつかり合う。その中で少年は自由を貫き通す事ができるのか……。音楽が適当に入ったライトロボットSF。空想科学祭に細々と参加しています。

第一章 テレーゼ

音楽にジャンルはない。あるのは良い音楽と悪い音楽だけだ

オレは自由でありたい。どんな時も。そして自由を侵されたくない。誰に対しても。

この世界には本当の自由など存在しないのかもしれない。
だからこそオレは自由を持ち続けていたい。どう思われようと構わない。

この摩天楼の下に今、目の前にいる女はオレの自由を必ず侵す、自由の権利を剥奪する・・・そんな気がした。だからこそ自由を剥奪される前に、オレは目の前の女に言い放った。

「髪の毛、切りに行ってきます」

「ちよつと待って、ヨハン・ディアグレフ君」

なぜか怒っている金髪ショートヘアの女教師、テレーゼ・キャロラインとか言ったか。

それよりもなぜオレはあんな事を考えていたのか全く覚えてない。
よくよく考えてみれば、権利とか、剥奪とかってオレはあまり使わないよな・・・。

「ヨハン君、聞してる？」

「いや、聞いてないです」

「だから、なぜジャージに着替えてないの？」

やはり怒っているあの女教師。まあそれは別にいい。

午前の体育の授業。校庭に学校指定のジャージを着ていない、オレを含めた三人の人間がいた。

ジャージを忘れた柔らかな芥子色の髪でメガネのたぶん美少年、アーサー・ネヴィソン。

体育見学常習者で体の弱い亜麻色ロングヘアーのたぶん美少女、リユリ・メシアン。

男にしては長い髪で自称自由人のオレ、ヨハン・ディアギレフの三名だ。

たぶん、というのは周囲がそう言うのでなんとなくつけた。

「ヨハン君、聞ってるの？」

「聞いてないです、テレーゼ先生」

「どうして聞いてないの？」

「走ったら髪の毛が目に入るじゃないですか？」

敢えて話を噛み合わせない、噛み合わせてやる必要なら全くない。少しだけ余所見をして見ると、アーサーが、それはヤバい！みたいな感じのジェスチャーをしている。たぶん外からしてみれば挑発してるように見えるだろうな。

先生の方に顔を向けて見る。顔がかなり恐い、絶対にキレている。

「髪の毛なんか結べば良いじゃない！ねえ、皆もそう思うでしょ！」

そう言い、先生が皆の方を向いた瞬間に、オレは校庭にある正門

に、全速力で走った。

「先生！いません！」

「えっ！？ホント？」

別に消えた訳じゃないだろ、と心の中でツツコミをしつつ、オレは校門を開けて、二十階を優に越えるビルの合間を走りさった。

そろそろ歩いても良いかと思えたのは磁力信号を渡り終えた後だった。

磁力信号とは一方から出てくる橋のような道（歩道のほうが車道より高い）は信号が青から赤へ変わるときだけ磁石の性質を持ち、全ての靴屋で売られている靴の裏にも磁石が付いており信号の変わり際に磁石がくっつき合って動けなくなり、橋と共に戻されるといふ信号だ。

その前になんでこんな熱心に説明しなければならないのか？

顔を上げるとショーウィンドウがあり、自分の顔がガラスに移っていた。

結構目付きが悪いがコレくらいがちょうどいいだろう。

髪の毛は確かに長かったが別にどうでも良かった。

顔を上げると空ではなくディエーチが見えた。

ディエーチというのは十階に作られた第二の道路の事で、車道と歩道の両方がオレの頭上にある。なので地面であるここは朝なのにも関わらず街灯が灯っている。

ここは太陽の光が届かないという事もあり、歩いている人が少ない。不気味という意見も聞いたことがある。

まあこんな所に青ジーンズとよく解らない模様の書いたラ・マリエッタ（Ｔシャツ）を着たヤツが居たら不良にしか見えないだろう。実際そうだが。

走るか・・・目的地はココじゃない。オレは静けさの中走り始めた。

車が浮いている浮いていないに関わらず渋滞していた。ほとんどの車が声しか聞こえないラジオを聞いている。

誰かが携帯でニュース番組を見ていた。

アナウンサーの声しか聞こえない。

一台の車が映画を見ていた。

俳優の声しか聞こえない。

この世界に音楽は存在しない。

走りに走ってオレが到着したのは、ほぼ毎日来ているゴミの山だ。この場所は人工の島の焼却場で、陸から鉄橋で渡る事が出来る。

そしてこのゴミの山とは、今では取り扱っている店が減った自動車というモノに付いていた足、つまりタイヤの山なのだ。^ア

だからといってタイヤで無邪気に遊ぶ訳じゃない。

数あるタイヤの山の中から、いつものタイヤの所に行き、そのタイヤを退かす。

そうするとタイヤの下から黒塗りでツヤのある物体が現れた。タイヤではない。

角張っているが、四角くない。滑らかな曲線があるが、丸くない。

オレもその名前は知らない。ただ、手前にある黒塗りの蓋を開けた。開けると白と黒の鍵盤が現れた。いつもなら目の前にある場所に紙を置くのだが、鞆は学校に置いて来てしまった。

仕方ない、覚えている曲を弾くか。

白と黒の鍵盤に手を置く。白の鍵盤を指で押さえると、透き通る

ような綺麗な音が響いた。すぐに続けて他の鍵盤を押さえる。

指の速度が踊る様に速くなると同時に音も速くなった。

それはもう既に音では無く、曲となっていた。

透き通るような音色が沈黙を支配して行く。

曲が次第に遅くなり、音が消えて行き、勝手に動いていた指も既に止まっていた。

これを弾いていると不思議と気分が良くなる気がする。

もう一度弾こうかと思ったその時、ソイツが空から降りて来た。

人型。最初はそれしか確認出来なかった。何故なら、タイヤの山が崩れたからだ。

タイヤが落ちてくる。鍵盤に足を掛け、オレは黒い物体を庇う。

タイヤがオレの背中に落ちた。かなり痛い。黒い物体に当たっていたら絶対に壊れてしまっただろう。それだけ大事なモノだ、コレは。

目の前にあったタイヤの山が無くなり、人型のモノがこちらを見ていた。

体が赤と黒が変に混ざったような色をしている。今頃気が付いたがソイツは目が無いにもかかわらず、オレの方を顔が向いている。

今になって、逃げなければ、と思い出した瞬間、空から二体目の黒塗りの物体が現れた。

二体目は急降下しながら、右腕を突き出しその鋭く、長い指で一体目を突き刺そうとした。一体目はオレの方を向いたまま動かない。やっぱり見えてない。そう思った瞬間、二体目の五本の指が一体目の左肩に突き刺さり、二体目は一体目を海に落とした。

二体目は一体目と同じ人型で、目測で二十メートルはありそうだ。外見は何だか角張っていて重そうな雰囲気だ。全体的に黒く、少しだけ銀色の装飾がされており、背中には翼竜の翼の骨格のようなモノが二本付き、それぞれ六本に枝分かれている。

すると突然ソレの頭が開いて人が一人出て来る。

「テレーゼ先生・・・」

「あつ、ヨハン君髪の毛切ってないんだ・・・」

「先生、今髪の毛関係無いですよね？」

「そつか、やっぱりヨハン君は・・・」

「聞いてますか？」

「ヨハン君！やっぱり君はこの、シンフォニアに乗る運転なんだよ！」

清々しい笑顔で先生そう言ったが、妙な沈黙が訪れた。

シンフォニア、とかいう聞いた事がない単語のせいだと思うが、原因は他にある気がする。テレーゼ先生は、シンフォニアと呼ばれたモノの頭から身を乗り出しながら、軽く咳払いした後、こう言った。

「えっと、君はコレに乗る運動なんだよ？」

「運命、ですか？」

「そうよ！それ、それ、それよ！」

そんなんでこの人、よく教師に成れたな・・・。

そう思った瞬間、海に沈んだはずの一体目がシンフォニアの後ろに現れた。

「やっぱ、あんなんじゃないわね・・・ヨハン君、手荒くするから！」

オレが何か言う前に、シンフォニアの黒い手に捕まえられ、そのままシンフォニアの開いている頭に放り込まれた。

「ヨハン君大丈夫？」

「頭打って大丈夫なわけ無いだろ！」

テレーゼ先生は適当に笑ってごまかしている様だ。

少し周りを見渡すとシンフォニアの頭の中は一人であれば結構広く、先生は真ん中より少し前にパイプ椅子に座って前を向いている。その視線の先のモニターに、一体目の姿が写しだされていた。

「行くよ！！！」

先生が叫ぶと同時にシンフォニアが一体目に向かって走り出した。走り出しシンフォニアが揺れると先生に繋がっているケーブルも揺れている。だいたい何のためのケーブルなのか。

モニターを見るとシンフォニアの右拳が一体目に向かっていて。

一体目はそれを左に避けた。

続いて勢いよく左拳を突き出したが、右に避けられてしまう。間もなく右拳を繰り出すも、そのままの体勢で右に避けられた。なぜ目が見えないのに攻撃を避けられるのか。

こうした攻撃が続く中、オレは何故かイライラして来た。どちらの攻撃も全く当たらず決着が付かない。一体目はシンフォニアに一切攻撃して来ないし、シンフォニアの攻撃は全く当たらないからだ。

「なんか武器とか必殺技みたいなのねえのかよ！」

「あつ、忘れてた！」

おい、なんだソレは。武器とかあったらあんなシャドーボクシングなんかなくてもよかっただろう。

今の隙に一体目は後ろに下がり距離を置き始め、そして顔の下が割れた。あれは・・・口か？

「ヴィイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイ」

物凄い声にすぐに耳を塞いだ。あの声は……男？滑らかな旋律を長く伸ばした神秘的な声だが、身体の内側から何かを壊していた。そう、たとえるなら……精神……？

「ヨハン君耳塞いで！」

「遅いわ！注意遅い！」

あのヤロウ……口が開いた時点で耳塞いでやがった……
……まだ耳がピリピリする……。

いきなり衝撃が起き、床に叩きつけられた。先生は椅子ごと前に倒れ、モニターに顔をぶつけていた。そりゃあパイプ椅子だし仕方ないだろうな。モニターを見ると隙だらけのシンフォニアに一体目の蹴りが直撃し元焼却工場にめり込んだ様だ。

もう一体目は声を出していない。

「ヨハン君、大丈夫？」

「アンタが大丈夫か！というか、さつさと武器使ってくれ！」

「その為に君を呼ぼうと思ってたんだよ！」

一瞬意味が分からなくなった。いや、今のは質問に答えて無い気がする。

オレが今の言葉の意味を考えている間に先生は何か操作をしており、し終わるとで目の前のモノを見た。それは見慣れた白と黒の鍵盤だった。なんであの鍵盤がここに・・・？

この鍵盤を知っていてああ言ったのだから先生はオレがアレを弾ける事を知っているのかもしれない。

「ヨハン君は指が器用だったよね！」

そんな事か・・・。そりゃアレを七年近くも弾いているのだから、指も器用になるだろう。アレがバレなくて少しほっとした。しかし、モニターを見ると一体目がこちらに走って来ている。蹴られたせいで結構飛ばされたらしく、まだ距離はあるようだが安心は出来なかった。

話が反れた気がする。大体鍵盤は武器じゃない。

「誰がそんなモン出せて言った！武器出せよ武器を！」

「だから器楽武装なんだって！ヨハン君がコレをやるんだよ！」

アンヌ先生の口から、また変な単語が出て来た・・・だが話を逸らすワケにはいかない。

「それだったらアンタがやればいいだろ」

「だって私、コレに乗るの初めてだし・・・」

初めてって言ったか、今。だから弾けないってか、このヤロウ。とりあえず聞かなかった事にしよう。足音が近くなってきた。一体目がもうすぐ側まで来ている危険な状況らしい。

「弾けば良いんだろ、弾けば！」

ここで死んだら自由もクソも無い！半ばヤケクソで言ってしまったかもしれない。

オレは鍵盤の上に手を置いた。しかし先生が鍵盤の前に立っていたので先生の肩越しに鍵盤を見ていたので、何か先生を包み込むような体勢だったが今は関係ない。

そしてオレは弾く。自由のために。

鍵盤の上を指が踊っている。

透き通るような音が辺りを包む。

一体目がよるめく。音に弱いのか？

それを知ったからといって無茶苦茶に弾いたりしない。

鍵盤を見なくてもこの曲は何度も弾いた。記憶している。

また一体目がよるめいた。やはり音に弱いようだ。

音の旋律が青い空に響く。

旋律と同時に黒い棒が後ろから現れた。

形からして背中の中六つに枝分かれた骨のような翼の先端。

その黒い棒は白い音の刃を鍵盤の様に出していた。
ドーディチ

十二の黒い棒は一体目の周囲を回りながら浮遊していた。

曲のテンポの様に。穏やかに。

旋律の最中に一体目の右腕が突然、音の刃を帯びた黒い棒に斬り捨てられた。

続いて左腕が背後の音の刃に切断された。

黒い棒が一体目に順番に三本刺さり、一体目は焼却工場の前で倒れた。

何も無い広い場所で倒れたので、なにかが下敷きになっている事は無いだろう。

しばらく曲を弾き続けていたが、黒い棒がシンフォニアの周囲を回っていて物騒だったので曲を止めた。

「これで良いのか？」

自分としてはもっと弾きたかったが弾く目的は一体目を倒すことだったのでオレは一応先生に聞いた。黒い棒は視界から消えているので、元の場所に戻ったのだらう。

「やっぱりさ・・・運命だね？」

先生はオレを見ず呟く様に言った。

運命という言葉は嫌いだ。この世で一番嫌いな言葉だ。

オレは運命から逃れるために自由に生きていく事を決めたのだから。

「運命なんてそんなモノ無いだろ」

先生は突然振り向きシアンブルーの目でオレを見つめて来た。かと思うと突然、笑顔になった。

「そうなのかな？」

笑顔で問いかけてきた先生を見て一つ思う事があった。よくわからないな、この人は。

交響曲は始まったばかりだ。
シンフォニア

第1楽章 テレーゼ（後書き）

どうも作者の木村です。

この作品は音楽とロボットを合わせた設定でやっていきますが一歩間違えるとアレになるな・・・という気がしてなりませんよ。

アレが何かは想像におまかせします。

とりあえず時間だけがないので更新は速くしたいと思っています。

（今回の音楽）

ベートーヴェン：ピアノソナタ第24番「テレーゼ」

23番から4年のブランクが空いた後の一曲。

テレーゼ・フォン・ブルンスヴィックという伯爵令嬢に捧げられた。

第1楽章 Adagio cantabile - Allegro,
manon troppo

第2楽章 Allegro vivace

の二つの楽章から成る。ちなみに一体目は第1楽章の途中で撃破された。

ついでに言うとヨハン君は題名を知りません。

レオニヌス：「地上のすべての国々はみた」から
ヴィイイイというのはココから抜粋。

多声音楽など木村にはよく解らないところ。

ただレオニヌスは1150年から1201年ごろまで活躍したようなので結構古い音楽らしい。

とりあえず書くこと書いたので長くなる前に終わらせますよ、はい。
後書きっぽいのはまた時間がある時にしたいと思います。

あ、苦情やお願い、クレームや感想などありましたら送りつけちゃ
ってくださいね。

それではまた。

第二楽章 クライス レリアーナ（上）

その才能に驚く他ないが、残念な事に彼は傍若無人な人間だ。

「シンフォニアって何ですか？」

「シンフォニアっていうのは、対オルガヌム戦闘用の機械の事ね。あとネーミングは適当だから、その所は何も聞かないですよ？」

「オルガヌムって・・・？」

「オルガヌムっていうのは、さっき戦ったヤツの事で三つつ位種類があるわ。さっきクラヴサンが倒したのはアルフレッド型みたいね」

「クラヴサン・・・？」

「クラヴサンはヨハン君が乗る事になった、あの黒色^{ネーロ}のヤツの名前だよ。他に質問とかある？」

「先生、近いです・・・」

今、目の前に、いや鼻のすぐ前に先生がいる。

このままの体制だとなんかアブナイ気がする・・・。

先生は渋々離れていき、元々座っていたソファに腰掛けた。ていうか渋々って・・・？

ここは六番倉庫の中でシンフォニア三機が待機している。見た感じでは、黒・銀・茶色と金色のシンフォニアの三機。その為スパー^{ネーロラルシェンマイナーネーロ}

スがあまり無く、隅の方にあるソファに向かい合って座っていた。

「そのオルガヌムってヤツはどっから沸いて来たんですか」

「なんか、月から沸いて来たみたい。でも数は一定量なんだってヨハン君が来てくれたからきつとすぐ終わっちゃうよ！」

妙にテンションの高い先生。無理矢理連れて来られてテンションの低いオレ。

真っ昼間だけど今なら十秒で寝れる・・・大事な事を言い忘れていた。

「その前にオレはまだ、乗るとは言ってませんよ？」

「何言ってたんだ、上手く弾けてたじゃねえか」

話に割り込んできたその男を睨みつける先生のシアンブルーの目が恐ろしい。

その眼力を教師の威厳として使えばいいものを。

先生が睨みつける先には、煙草を吸う小汚い茶色のジャケットに擦り切れた蒼いジーンズを穿いた茜色の髪の男、フィリップ・アダムスが壁に寄りかかって立っていた。一通り自己紹介はして貰った。鍵盤を弾くと言ったこの人はタダモノでは無いだろう。

この時代に一種の麻薬とされ、売買および服用を禁じられている煙草を持ち、吸っているこの男はやはりタダモノでは無いだろう。

「オツチャン、乗るも乗らないもニイチャンの自由だろ？」

窓際のパイプ椅子に座っているダボダボのコート・・・いや、汚れすぎて白に見えない白衣を着たほつれ気味の栗毛の女、マリア・

ブラネスが飽きれながら言った。

今名前を出した二人しか自己紹介されていない。そして今、この倉庫の中にはオレを含め四人しかいない。

つまりこのクラブサンを所持している組織・・・いや、グループにはフィリップとマリア、そしてテレーゼ先生の三名しかいない、と言う事になる。

「オツチャン言うな！まだ28だ！毎回言ってるだろ！」

別に良いじゃない、と流したマリア。

年齢の違いって結構大事な話だと思うぞ？まあ、その髭面だったらオツチャンと呼ばれても不思議ではないな。

「で、乗らないんだろ？ニイチャン」

いきなり話しかけられて反応が遅くなったが、質問を頭の中で確認し軽く頷いた。アレが弾けるからってクラブサンには乗りたく無かった。

エッ、嘘！と言う声も先生から聞こえるが、色々言われそうなので無視した。

フィリップがオレに、冷たい視線を突き刺している。すると彼の口が開いた。

「坊主、何故乗らない？オマエには戦えるだけの力が備わっている。ソレこそ運命、ってヤツだろ？」

煙草の煙と共に出てきた運命という単語に反応してしまう。

この男はオレがクラブサンに乗らない事に疑問を抱いて居るらしい。

「マリアさんも言いましたけど、乗る事も乗らない事もオレの自由なんですよ？フィリップさん」

嫌味っぽく言ってやった。ホントは運命なんて知るか！とキレてやるうと思っただが、どうにもガキっぽいので心の中に留めておいた。フィリップは溜め息をつきながら錆付いたホワイボードに歩み寄り、その下にあった水の入ったバケツに短くなった煙草を投げ入れた。ホワイボードにはブーツの様な形の陸の地図が貼ってあった。

所々バツマークが付いている。

「このイタリア領土の中に、機能している都市はもうこの場所、旧ローマと旧ミラノしかねえんだよ、坊主」

多分この時代にその地名を知っている人は少ないだろう。

過去を捨て、自分達の手で未来を作って行くと言う人間達の技術革命が起きた事により、ローマやミラノといった地名は無くなり、番号で呼ばれている。

さらに数学、幾何学、理科、技術が特化され、宗教、音楽、美術、古典、歴史といった科目がすべて排除された為に過去の単語を知る人は少ないのだ、と言う事をあの糞親父に叩き込まれたワケだが。

「そしてヨーロッパの中では、旧マドリード、旧ベルリン、旧ロンドンが今のところ機能している事が確認できた。その他は死に掛けか、死んでいる都市だ。だがそれはヨーロッパだけの話で他の大陸がどうなっているのかは全く解らん。もう既にヨーロッパ以外は滅びているかもしれない」

フィリップが説明し終わると、マリアは少し陰しい表情になり、先生は顔が俯いた。

オレはソファから立ち上がりながら叫んだ。

「だからってオレがアレに乗る理由にはならないだろ！」

「シンフォニアに乗れて尚且つ器楽武装が使えるオマエを見す見す野放しにしろって言うのか！？今は一人でも戦力が要る状況だ、分かれ！」

これだから大人は嫌いだ。使えるヤツは運命やら天才などと言って離し立て、使えないヤツは捨てる。

その昔、人は平等とか言ったオヤジ共が居たらしいが、才能という言葉が生まれた時点で平等じゃないだろう。

今、オレは使えると言われた事に腹が立っている、とても。誰かにとつて使える、都合の良いヤツにはなりたくない。オレは使えなくてもいい、自由であれば。それだけで。

「分かんねえよ！そんな下らねえ事！誰が乗ってやるか、そんなモンに！」

「この生意気な糞餓鬼が！」

右拳で殴り掛かって来るフィリップ。暴力で解決すると思っているのか。

とりあえず軽く避けて裏拳でも当ててやるか。

「ケンカはダメだつて！」

いきなりオレとフィリップの間に割って入ってきた先生。それに気づいて拳を下ろしたフィリップ。

「二人ともケンカするために会ったワケじゃないでしょ！」

涙目で訴えるように言った先生。

まあな、と先程とは全く態度の違うフィリップ。少し困ったような表情をしている様に見える・・・気がする。

「フィリップ、叩くのはダメ・・・痛いよ、大きな声で怒鳴るのもダメ・・・怖いよ、そんなことしても変わらないよ・・・」

俯いて細々と囁いた先生。声が小さかったが十分に聞こえる距離だった。

フィリップは明後日の方を向いている。叱られたから、というより顔がまともに見れないと言う方が正しいように見える。

「ヨハン君も、そんな才能があるんだから、人助けだと思って・・・」

「オレは人助けするつもりはさらさらありません。ただ自由に居たい、それだけです」

先生がハッと顔を上げる。少し涙目だ。人助けをしないという事に異議を唱えているのかもしれない。

オレには人を助ける意味が解らない、所詮自業自得ではないのだろうか？自分の事なのだから自分で解決して欲しい。それこそ迷惑ではないだろうか？

死にたきや勝手に死ぬ。迷惑かけずにな。

先生が今にも泣き崩れてしまいそうに見えるが、生徒の前なので泣けないのだろう。

「その自由ってのはわかった。だがなオルガヌムは世界を滅ぼし

掛けている。世界がぶっ壊れたらオマエもタダじゃ済まねえだろう」

「だから何ですか」

はつきり言って世界がどうなるかなんて興味ない。世界が水に覆われようが、砂漠になろうが、月が堕ちて来ようが関係ない。独りで生きていく自信がある。

地球が真っ二つになったら・・・その時はその時だ。

フィリップが呆氣にとられたような驚いた顔をしている。
しばしの沈黙。誰も言葉が出ないらしい。

「ニイチャン、一日考えてみたらどうよ？」

振り向くとマリアがパイプ椅子に座りながらこちらを見ている、オレに話しかけたらしい。

「考え直すとも思ってるんですか？」

「話の流れでそう言ったほうがいいと思った」

流れて・・・まあ別にいいけど。

そう言くとマリアはポケットから煙草を取り出し、マッチに火をつけ煙草に火を移した。

この町でマッチ、ライターなどの小型火器を所持していると人為火災未遂の容疑で逮捕される。マリアはマッチを振って火を消すと、ホワイトボード下の水入りバケツに投げた。

綺麗な放物線を描いてマッチはバケツではなく床に落ちた。
マリアが口に含んだ煙を吹き出すと不意にボソツと呟いた。

「アンタら学校は？」

あ、と言い残し開いた口がしばらく閉まらなかった先生だった。

残り数分で授業が終わるのにもかかわらず、オレは屋上で掌を枕にして寝そべっていた。正直言つてあの密室空間に何分もいることが耐えられない。窓はあるから密室ではないな。

あの後、先生に本日二度目の連行をされたオレは、校長の次に偉そうな人に先生と共に謝る破目になった。先生も無断外出だったらしい。

ほとんど空返事を通し、話を聞いていなかった。

偉そうなヤツが紙を何枚か押し付けて反省しろと言っていた……かもしれない。

先生が何やら弁解していた……気がする。

偉そうなヤツが時計をちらちら見て、さつさと教室に戻れと怒つて職員室に戻ってしまったと思う……数枚の紙を残して。

そしてオレは記憶が不確かであるような気がして、いつもの屋上に戻ってきたのだった。

側にはクシャクシャに丸まった紙が四つ、誰に作り方を教えてもらったのか分からない紙ヒコーキが一つある。飛ばしてみたら面白いかも、と思つたが気分が乗らないのでそのまま側に置いてある。

空にはドームに穴が開いたかのように、数々の摩天楼の間から蒼い空が見えていた。

商業地区ではないのでディエーチは存在していないが、今の人はこの摩天楼に住んでいる。

青は赤に変わりつつある空。同じ形の無い空は見ていて飽きない。空に手を伸ばす。

あそこまで飛んで行きたい。自由に遠く高く飛んでみたい。何度ここでそう思つたことが。

だけど人は自由にはなれない。必ず不自由が付いて回る。

ビル風が吹き、頬を伝っていく。丸めた紙がカサカサと音を立てていく。

オレはすぐさま起き上がり、紙ヒコーキを手にとると風の向かう方へ飛ばした。

風に乗るビルの谷間を悠悠と飛んでいく紙ヒコーキ。

しかしいつかその自由の翼は落ちてしまうだろう。

この世に永遠など存在しない。きっと当たり前の事なのだろう。

それでも人は永遠を求め続ける。それこそ永遠に。

希望だけが永遠かもしれない。

しばらくその紙ヒコーキを眺めてそんな事を考えていた。見失ってしまった。

「戻っていたんだな？」

後ろから声が聞こえた。

振り向くと芥子色の髪の毛で伊達メガネを掛けた少年、アーサーが軽く片手を挙げていた。隣に亜麻色のロングヘアーの少女、リュリが微笑していた。

アーサーは軽そうなおレのカバンを投げて渡してきたので、オレはカバンをうまく受け止めながら返事をした。

「一応な」

空返事だったかもしれない。

「フツと消えてフラツと現れるのがヨハンだからな、いつもの場所に戻っていると思ったよ」

ソレは影が薄いつて事を遠回しに言っているだけなのか？
反射的に目を逸らし舌打ちした。

グシャツという音に続き、痛え！とアーサーの叫びが聞こえた。
二人を見ると、アーサーが頭を抱えて蹲っている隣でリュリが彼に先程の微笑を向けていた。

凶器・・・推測によるとカバンだと思われる。

備考・・・病弱な少女による犯行。

動機・・・彼の迂闊な発言による衝動的犯行。

頭の中に今の状況が簡潔に現れた。オレなんかスゲエ。

「帰るか！」

無理矢理に笑顔を作って問いかけた。一番妥当な判断かもしれない。

「うん！」

他の男子であれば見とれてしまう程の笑顔で返事をしたりユリ。

「そうだな！」

片手で後頭部を押さえながら立ち上がって返事したアーサー。

屋上から出る直前、振り返り空を見上げる。

二人とは近くも遠くも無い距離で付き合っていると思っている。

二人がどう思っているかは分からない。

二人を守るためにシンフォニアに乗れと言われたとしてもオレは乗らない。

親友でもなく疎遠でもない、空模様のようによくわからない関係だから。

「理由になつて無い・・・」

独り言を空に向かって呟くとオレは独り言を言ってしまう自分の頭の心配をしつつ屋上から出た。

エレベーターを降りると十八階だった。

居住地区と工業地区のビルは平均十五階、商業地区のビルは平均二十階建てのモノが多いため、オレの住むビルは平均より高く作られている。

エレベーターから降りたのはオレだけだった。

ビルの中心にエレベーターが四機稼働しておりちよつとした広間のような場所に出る。

エレベーターの前には廊下があり、突き当たると人が住む部屋のドアが並ぶ廊下に出る。

また熱心に説明している自分がいる。誰に説明してんだ？

オルガナムとかシンフォニアとか意味分からん言葉のせいで頭がおかしくなったのかもしれない……。

一つの黒いドアの前で止まり、ポケットから鍵を取り出して上の鍵を開ける。

そういえば指紋認証型や網膜認証型の鍵はウイルスやらハッキングやらで簡単に初期設定をし直す事ができ、普通に入ることができるとニュースで言ってたな……。犯人は部屋に居座り続けたらしく、元の住人がビルの管理人にリセットを要求するも効果が無く、警察は窓からの強行突破で犯人を逮捕したらしい。

要はどんなモノを作ってもソレを超えるモノが作られるのだ。

いい意味でも、悪い意味でも。

思い出している間に下の鍵も開け、ドアを半開きにしていた。

誰がいる……。？中が少し明るかったため直感した。

中の構造は玄関とキッチンもあるリビングの間に廊下があり、個室が二部屋とトイレ兼シャワールームが廊下を挟んで存在している。今はリビングから光が漏れているらしい。

誰がいるかは分かっている。ただ顔を合わせたくない……。中に入り玄関のドアを閉め、鍵も一つ閉めた。廊下を忍び足で歩いている。もう少しでオレの部屋に着く。ドアノブに手を掛けた。

「帰っていたのか、ヨハン」

ばれたか……。軽く舌打ちした。振り向かず返事をする。

「ああ、親父」

身体を動かさず後ろを見た。短く切った黒髪に挑発的な目つきのその上にメガネ……。多分伊達ではないを掛けた親父が、いつもの誰も信用してないような目つきでこちらを見ていた。

胃がキリキリと音を立てている、それほどの嫌悪感。敵対心。

「勉強はしているのか？」

「当たり前だろ？」

外から見れば普通の会話だが、二人の間には重すぎる空気が流れ、オレは親父にありつただけの嫌悪感を剥き出しにし睨み付けている。さらに親父の挑発的な目つきがオレの敵対心を駆り立てる。

時間が過ぎるのが遅い……。胃がかなり痛く、その痛みも嫌悪感に混ぜて親父に送りつけている。

「……………そうか」

戦闘終了。

親父は自分の個室へ入っていった。嵐は過ぎ去った。

胃の痛みから解放され、冷や汗が吹き出し疲労を身体に感じた。

自分の部屋へ入るとすぐにベッドに倒れこんだ。今日一日の疲労はココから来たんじゃないだろうか？

ていうかもう何も考えたくねえ。

一瞬シンフォニアが頭を掠めたが、ソレの答えは出ていたので気にも留めず深い眠りに落ちていった。

第二楽章 クライス レリアーナ（上）（後書き）

どうもまた木村です。

どうやら言わなきゃならない事が沢山あるようです。

まず、タイトルは曲の名前なので本編には80パーセント関係ありません！

クライス・レリアーナなんてキャラはでませんよ！

とりあえず（上）なので曲の紹介はありません。

なるべく話の内容とタイトルが合うように選んでみますが今回だけは許してください・・・お願いします。

あと、ネーロとか変なフリガナが振ってあったと思いますが、舞台が旧ローマということもあり、50パーセントくらい信じていいイタリア語です。

なぜ50パーセントなのかというと、「六ヶ国語会話1」なる本を持っておりそこに書いてあったモノを引用したのですが、コレの初版が昭和35年ということもあり半分信用している次第であります。さて、結構長くなってきたのでこれで終わりにしたいと思います。では、また。

第二楽章 クライス レリアーナ（下）（前書き）

今回は無駄に長い気がします・・・

第二楽章 クライス レリアーナ（下）

太陽が真上にあるこの時間、屋外にいるのはこの三人だけだろう。
季節でいうと夏にあたる。^{レスター}

ビルが密集しているので暑さは倍増、他の学校なら涼しいビルの中で飯が食えるのだが……。いやこちらも中に入れば同じかだが中は疲れる、息苦しい。

オレはレタス、チキンカツ、パン、チキン、レタスで作られた「愚者のサンドウィッチ」の二切れ目を食べ終えた。コンビ二物なので味付けは微妙だったがチキンカツサンドと値段が同じだったのでチキンが多い分、お得だった。

コンビ二袋の中にゴミを入れそのまま放置。二つ目のサンドウィッチである「太陽のサンドウィッチ」を掴もうとするとリュリに手を叩かれた。

「ねえ……。聞いてた……。？」

「ていうか喋っていたのか？」

どうせ大した話じゃないだろ、とは言わず「太陽のサンドウィッチ」の袋を開ける。

このサンドウィッチは簡単に言って終えばタマゴサンドだ。

しかしこれは生物実験機関で遺伝子組み替えされて作られた鳥「フェニックス」が生んだ「太陽の卵」を使ったタマゴサンドなのだから。

フェニックスってネーミングはともかく「太陽の卵」を使った絶品グルメはかなり評判が良いらしい。

サンドウィッチの一切れを右手に持ち、そして消える……。・

・・・は？

「ああ、美味しい」

ああ、アーサー食ったのかよ・・・なぜかサンドウィッチが食われていくのを見て、ああ最後の一口を食われた・・・・食われた？

我に返ったオレは目に見えない速度でヤツの首をしめる・・・！

「コルアア！人の昼飯何食つとるんじや吐き出せさつさと吐き出せサンドウィッチも懺悔も魂も全て吐き出せ！」

「おえーっ、魂でましたーっ」

三秒の沈黙。オレは片手首締めから両手首締めに変更。

「ぐうえ、ギブ、ギブ！冗談だから！それに出ないって！ローヴオゆで卵のSの字も出ないって！」

「・・・・・・・・・・美味し」

「・・・・・・・・・・ハア？」

何で食ってんだよ、アンタ？ていうか二切れ目・・・・・・・・。。

「ホラ、自業自得」

「なんかしたか、オレ」

おまえ話聞いてなかっただろ？と問いかけてくるアーサー。

さあ？と空返事をする。彼は呆れながら返事を返した。

「リュリが休みにどこかへ行こうって言ってたんだよ、ヨハンと二人で」

「さつ、三人で！」

ああそれか……。リュリの顔が紅く染まっているのはとりあえずスル！。何されるか分かったモンじゃない。

気がかりはどうしてそんなに「何処か」へ行きたいのか、なぜオレとなのか。お前らだったら他にいるだろ、ファンクラブの奴らとか。

「ほらっ、前にさ「また今度」って言ってたでしょ……」

前……。か。いつも何処かへ行こうと誘われた時は「また今度」で断っている。それほど込み入った関係にはなりたくなかった。

どこか面倒になって来たので左手でカバンを持ち立ち上がった。昼飯のゴミは勝手に中身を食われたのでそのまま放置した。

「帰るのか？」

「ああ、やる事あるからまた今度な」

そうアーサーに返事をし、右手を挙げ屋上からでる。

オレにはやる事など一つも無い事を二人は知っているだろう。どうして二人はそのことを言わないのか、知らない親切でも掛けているのだろうか。こちらは知らない親切など掛けて欲しくも無いのに。

どうして二人はオレを選ぶのか。オレと行く「何処か」に意味があるのだろうか。オレが冷たくすれば二人は遠ざかっていくだろうか……。

……また今度考えよう。

一瞬「また今度」と言つて逃げてしまふ自分が情けなく思えた。

またここに来てしまった……いや、この場所くらいしか行く場所が無いのかもしれない。

オレはいつもの元ゴミ焼却場兼タイヤの放置所に来ていた。周りにはタイヤが溢れて山になり、昨日までは広がった元焼却場へ続く道がなんとか残っている。

元焼却場にはクラヴサンがめり込んで出来た楕円形の穴がぱつくりと口を開けるように広がっていた。

そして黒い物体がタイヤの山から剥き出しで佇んでいた。

昨日の事は本当だったのか……今更ながらそんな事をぼうつと考えていた。

黒い物体にゆつくりと近づき、その光沢のある表面を撫でるように触った。出しっ放しだったので少し熱を持っている。

そして横に長い黒いふたを開けた。そこには昨日と変わらない白ネーロと黒の綺麗な鍵盤が並んでいた。

「奇麗に作られているな、コレは」

「怖っ！」

反射的に振り向くとすぐ背後に、ほつれ気味の栗毛のマリアが不思議そうな目で鍵盤を見ていた。そしてその視線がオレのほうを見た。

「人見て第一声が、怖っ！って何？」

そんな汚い白衣着ていたらバケモノにも見えるだろ、多分。

「それより何していたんですか？」

「ニイチャンなんか……別に良いか。いや他に使えるモノ無いかと思つてさ、ニイチャンも来い」

「なんで命令形？」

「来い！」

マリアに腕を強く掴まれ元焼却場に連れて行かれた。千切れる！腕が千切れる！絶対手形付くって！

焼却場の中は大きな穴が窓の役割をし、少し傾いた日差しが差し込んでいた。

マリアにようやく腕を放され、最近の女性は細身で力が強い事を痛感した。

妙な臭いに鼻を摘まむ、色々な臭いが混じっているようだ。

ゴミ焼却場は今機能していないため、処分されていないゴミがあちこちに山になって放置されている。そのゴミの山は大小様々なモノが積み上げてあり、原型をとどめていないモノも存在している。マリアが一つのゴミの山をあさり始めた。この人にモラルという言葉は存在しないのか。正直見ていられない。

「で、決めたのかい？ニイチャン？」

いきなり顔も見ずに話しかけられ、ビックリするのを通り越しゾクツとした……。

突然話しかける癖を止めろ、と勢いで言おうと思ったが質問に答えていないので止めた。

「乗りません、絶対に」

「おつ、コレ使える」

聞いてねえ………マリアはオレを無視し、拾い上げたモノを白衣のポケットに入れていた。

「オルガヌムがどんなヤツか聞いてんの？」

またいきなりだな………もうどうでもいいか。しかしどんなヤツと聞かれてもあまりピンと来ない。

「敵………じゃないのか？」

「そりゃ敵だろうね。モノ壊してるし」

かなりアバウトだ………モノ壊してたら敵なのか？

「オルガヌムには視覚、味覚、嗅覚が無い。だがそれを補って余る聴覚が備わっている」

ゴミの山と格闘しながら、依然とオレのほうを向かずに話すマリ
ア。

「その聴覚はどんな音も聞き逃すことは無い。恐らく地球の全ての音を捉える事が出来るだろうね」

「で、オルガヌムを倒すのがシンフォニアなのか」

「そ。オルガヌムは突然強い音を聞かせると動きが遅くなるからね、その間に倒す。音を奏でる武器である器楽武装を装備しているのがシンフォニア」

「それとオレに何の関係があるんだ？」

△ジカ・インストウルメンターリス

「音の中で道具の音楽がオルガヌムによく聞こえ、効果がある。あの黒いのも例外じゃ無い。そしてオルガヌムは強い音が鳴る方へ移動しその音を消した後、また強い音の鳴る方へ移動、これを繰り返して八年間主要都市を滅ぼしていった」

長い説明の間にマリアは奥のゴミの山に向かっていったのでとりあえずついて行く。

「・・・・・・・・・・つまり？」

「つまり昨日のオルガヌムはニイチャンが呼んだって事かな」

まさか・・・アイツはオレが呼んだなんて・・・・・・・・正直半信半疑だ。

そこで会話が途切れ、ゴミをあさる音と時々鳴る金属音がひときわ目立つように聞こえた。

「けどあんた等だってシンフォニアで音を奏でてるだろ。あんた等がオルガヌムを呼び出してるんじゃないのか」

マリアがゴミをあさる手を止め、オレに半身だけ向け答える。その目は今までの彼女の目付きよりも鋭さを増していた。

「そう、私たちはそうやってオルガヌムを一体一体風潰しにしていく、コレが作戦。近づくオルガヌムはすべて消す」

その迫力に思わず唾を飲み込む。かと思うと目付きが緩み、顔と身体がこちらに向く。

「まっ、私は乗らないんだけどさ」

そう付け足すとマリアは両手を白衣のポケットに突っ込んだまま、真っ直ぐにオレの方へ歩み寄ってくる。

「とりあえず、両手出してみ」

そう言われ、両掌の指を前に向ける形で差し出した。とたんに力チャツと金属の音がした。

手元を見ると銀の輪がオレの両方の手首に通っていた。輪と輪は銀の鎖で繋がれている。

「なんだ、コレ！」

「うん？ ああ、旧型の手錠。捨ててあった」

「見れば分かる！ さっさと外せ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「聞けええ！」

「黙れ！」

その言葉を耳にした途端、首筋に首筋に激痛が走ると同時に意識が朦朧とし、オレは意識を失った。

目が覚めるとそこには清しい程澄み切った蒼い空がどこまでも広がっていた。
アッスッロ

そこには自分以外にクモもモノもヒトも何も無い。
そこには自分だけの自由の世界が広がっている。

こんな場所にたった一人で生きて行きたい、そして朽ちて行きたい。

だけどオレがヒトである限り、空は飛べない。
ヒトには自由の翼が無い。

じゃあ、なんで飛んでんだ、オレ？

手元を見ると手首には銀の手錠が掛けられている、いや、もつと
いろいろ付いてんな……二本の腕の手首と肘の間に銀色の
硬そうなりストバンド型の手枷が付けられ、そこにはケーブルが繋
がれており、ソレと同じような物が左右の二の腕と股と脛に付けら
れている。
ラルジェント

「なんだ、コレ！」

思わず口に出してしまった。よく見れば一度乗った事のあるクラ
ブサンの頭だった。
ラ・テスタ

気を失ったオレ乗っててよく飛んだな、コレ……………。

「おつ、ニイチャン生きてたか」

怨むべき声を聞き背後に振り返ると汚い白衣を着たままのマリア
が立っていた。その手にはケーブルのような紐が繋がっている黒い

D字型の取っ手に見えるモノを持っている。

「いやさあ、首筋にチョップして気絶させるヤツってドラマとかでもよくやってるけどさ、死ぬ可能性が五分五分くらいってフィリッパから聞いてホントに死んだかと思っただわー」

「ソレってオレが言うことじゃないか？いや、なんで勝手にヒト乗せて変なモン腕とか足に取り付けてんだよ！」

「ああ、首にも付いてるけど？」

「えっ、マジで？」

首のあたりを確かめてみるとブレスレットくらいの厚さの首輪が本当に付いていた。

コレはいったいなんなんだ………？思い切って聞いてみる事にした。

「なあ、この首輪は何のための首輪なんだよ？」

「お、いたいた」

「さっきも言ったけど聞けよ！」

「それどころじゃ無いんだよねえ、ほら前のアレ」

多少憤りは感じるが仕方なく前方に意識を集中させた。

最初はよく見えなかったが、目を凝らしてよく見るとステルス機が何かに見えた。最も今はステルス機なんて旧ローマでは作られていないだろうが。

「なんだ、アレは」

「オルガヌム・モデラート、としか言いようが無いね」

「たった一体ってことは結構でかいのか？」

無視かよ・・・どうやらオレが言った事が間違っているようだ。

目の前には蒼い空をバックに通常より高いビルがちらほら見える。
高度が徐々に下がっているようだ。

モデラートは目を凝らさずに見える距離に近づいていた、数百体の群れで。

銀色のモデラートは横幅が目算でクラヴサンの高さと同じくらいで厚さは二、三メートルって所だろう。

「一体じゃ無いだろ？」

マリアが嫌味をいやらしく言った。その言葉は少なくともオレには嫌味に聞こえた。

「そんなコト言ってる場合か？結構な数が来てるぞ！」

「言われなくてもっ！」

このままだと鉢合わせになるかもしれない。少しヒヤヒヤしてしまふ。

すると後方へ通り過ぎていくビルの動きが止まり、ビルはモニターの下へ消えていった。

なんていうか・・・さっきから前しか向いてないな、コイツ。

「周りが見えねえぞ、コイツ！」

「そのための首輪だよ！」

「解るように説明しろ、意味不明女！」

「ニイチャンが動かそうと思えばクラヴサンも同じように動く！
以上！」

「物足りないくらい簡潔な説明をどうも！」

つまり首輪の他に腕と足に付いている枷も身体と機体をリンクさせるモノなのだろうと勝手に勝手に解釈した。

そう考えるといきなり胃の中のモノが食道へ戻っていく。景色が蒼一色で目印がない事からクラヴサンが落ちていることに気付くのが遅くなった。幸い口の中まで戻ってくることはさせなかった。

突然、左の方から高い音が長く聞こえた。

頭を左に向けようと思うとクラヴサンの頭も左に動いたようだ。

結構遠くには茶色い箱を積んで作ったような二足歩行のシンフォニアがビルの上に立っていた。

ソイツの腰にある大砲のような金色のパイプが白っぽい音の弾丸を六連射した。弾丸は何体かのモデラートを貫通したが、群れは二手に分かれて逃げたため一気に全滅という訳にはいかなかったようだ。

分かれた内の一手はもう一体の銀色のシンフォニアが先回りしていた。

銀色は無駄なものがあまり無いヒト型のシンフォニアで、同じ色の棒が両手で握られていた。

地面から芽が顔を出すように、モニターの下からビルが次々と迫

り上がってきた。地面が近い。

頭を前へ戻して目前の比較的広い道路を着地地点とし、頭を動かさず足の指先から着地しようと思った。

道路には様様なモノが散乱していた。

砕かれたビルの残骸、車の形が残っている鉄クズ、人形のように動かないヒト。

元が何かすら解らないモノもあった。

そんなモノを見てもオレは何も感じなかった。だってヒトゴトだから、オレには関係無い。

後ろを向くと銀色のシンフォニアの方に行かなかったモデラートの群れがビルにぶつからないように身体を縦にして向かって来ていた。ビルがあるから左右には動けない事を確認した時、先頭と二番目の先端である口が開いた。

二人の女の声と共にさっきのシンフォニアと同じような音の弾丸を口から飛ばした。

跳躍するために膝を曲げようと思う、道路が少し沈んだような感覚を覚えると同時につま先に力を入れ跳躍しようと思うと、ビル五階くらい跳躍した。

そして落ちる前に飛ぶような感覚がし、ビルの階数がどんどん減っていくように見えた。

「おい、これじゃアイツら倒せねえぞ」

マリアに見せるために手錠の付いた両手を上へ上げると鎖の揺れる音がした。

「ふーん？やる気になったんだ？」

「時間が削られるのは嫌だからな」

質問しているようには全く聞こえず、どこか挑発的な口調で尋ねられた。もつとも時間が欲しいほどやりたい事も無いのだが。

あつそ、と素っ気無く返事を返したマリアは鍵盤を外そうとしない。

「鍵盤外せよ！」

「その鍵盤壊れてるから自分で外せるんだけど」

本当に、しかも簡単に外せた……。こんなモノに気付かずに縛られていた自分が本当に情けない……。モデラートの声
が下から聞こえなければ一時間は沈んでいただろう。

四、五人の知らない言葉を発する女の声と共に来る音の弾丸を、
酔いそうなくらいのスピードでかわしている最中に例の鍵盤が現れた。

やはり黒い^{ロロ}物体の鍵盤と同じモノに見える。

同じモノならば深く考えずに弾けばいい。時間なんて自由に過ぎていく。

弾こう、自由に。

指先で音を奏で始める。

激流のようなテンポ。

鍵盤のように白い音の刃を纏った黒い棒が宙を自在に動き回る。

鍵盤の上を指が踊る。

胸が高鳴るような旋律。

冷めていた心が抑え難い激情に変わる。

旋律が奏でられて一分が経った。

十二の黒い棒がモデラートを追い、刺さったかと思ったがモデラートの群れは寸前でかわしていった。さっきからコレと同じ展開を何回も見ている。

一回の攻撃につき十二本で奇襲しているが、二体倒すのが精一杯だ。

全て寸前で避けられる。

マリアが言った事は完全に嘘だ、音によってモデラートの動きが止まった事は一度も無い。だが、アイツに当たっても解決しない。何か策を考えなければ……。

考えながらも指を踊らせ曲を弾き続けている。

思い付いた。

思考では無く激情による直感。

「マリア、ビルに降ろせ」

ビルの上に爪先から降りた。先程の群れが大きく孤を描いて戻ってくる。

ソレが敵に対して有効かどうか考える前に、オレは指を止め右側の骨の様な翼を見ていた。

黒い棒が戻ってきて、枝分かれした六つの骨の先端に装着されたのを見届けると、一番外側の骨を根元から引き抜き、モデラートの群れに槍の様に投げた。

そしてすぐに曲を再開させると黒い槍の先端から白い音の刃が激情的の旋律と共に現われた。

突然槍からの旋律に一瞬モデラートの動きが止まる。

その一瞬は充分に足りた。

黒い槍に次々と突き刺さり、貫かれていくモデラート。

曲を弾いていた指を再び止めると黒い槍は失速し緩やかに落ちていった。

たった八体しか倒せなかった。勢いが足りなかったかもしれない。自分が戦っている群れにもまだ何十体が残っている。

十一本残っているから計算では全て倒せるかもしれないが、手元が狂って外すかもしれない。

手に持って戦えるか……？

そう思うと既に二本目の骨を折る音が聞こえた。

何かが問う。

そんな事をやる必要は無いんじゃないか？オマエは戦わないんじゃないのか……？

黒い腕が両手で十メートル前後の長さをした黒い槍の下の方を持っている。

確かにやる必要は無い。戦う必要も無い。だが今やらなければ死ぬ、オレが。

いつ死んでも構わない。けど殺される事だけはされたくない。

指がカタチだけの激情の旋律を奏でると槍の先端に白い音の刃が宿る。

オレが持つモノを他のモノの自由にはさせたくない。

ビルの上を跳躍しようと思う、次のビルの上に着地しようと思う、その動作を繰り返して近づいてくる群れに向かう。

もし、奴らが命乞いをしたならオレはこう返すだろう

最後の跳躍をするとモデラートが目前に迫る。槍を振りかざす思考とは別に指が無感情に曲を奏でる。

お前たちにオレを殺す自由があるのだから、お前たちを殺す自由がオレにはあるだろう、と。

第二楽章 クライス レリアーナ（下）（後書き）

どうも木村です。

個人的理由で時間が無いのでさっさと終わらせます。

クライスレリアーナ 作曲ロベルト・シューマン

題名のクライスレリアーナとは作家であり画家でもあり音楽家でもあったE・T・A・ホフマンの書いた音楽評論集の題名から引用されている。この作品はそれに靈感（突然ひらめく、素晴らしい考え。という意味らしいです）を得て作曲された。

この作品は1838年に作曲された、8曲からなるピアノ曲集で、シヨパンに献呈された曲。

- 第1曲 Agitatissimo 二短調
- 第2曲 Con molta espressione, non troppo presto 変口長調
- 第3曲 Molto agitato ト短調
- 第4曲 Lento assai 変口長調
- 第5曲 Vivace assai ト短調
- 第6曲 Lento assai 変口長調
- 第7曲 Molto presto 八短調
- 第8曲 Vivace scherzando ト短調の8曲。
（Wikipediaから引用しましたが他を見ると少し違うようです）

ああ、早く次話を書かなければ・・・ではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1605f/>

独奏のクラヴィーア

2010年10月9日07時37分発行